

乳児突然死症候群(SIDS)に関する研究 —周産期班—

研究協力者 仁志田 博司

(北里大学医学部小児科)

1. はじめに

SIDS および abortive SIDS の疫学的調査を周産(生)期の観点より行い、本症と種々の周産期因子との相関を検討し、その発生の予防および発生の予測を可能ならしめる危険因子 (risk factor) を見つけ出す事を目的とした。本研究は、周産期班4施設の協同研究とは別に、北里大学1施設で出生した児の *retrospective* および *prospective study* より本邦における SIDS および abortive SIDS の発生頻度を周産期学的観点から検討を加えた。

2. 研究方法

I. *retrospective study*: 1978~81年の4年間に北里大学病院で出生し生存して退院した5610例の内(表1)、妊娠経過、分娩時および新生児期に異常が認められた所謂 *high-risk infant* 1338例を対象として(表2)、往復ハガキにより質問を行った。回答の得られなかった症例には、同様な二次調査を行い、さらに回答の得られなかった症例には電話による三調査を行った。

II. *prospective study*: 1981年12月より1982年11月の12ヶ月間に北里大学病院で出生し、生存して退院した1518例を対象として、生後1ヶ月、3~4ヶ月、6~7ヶ月、12ヶ月の4度にわたり外来での健診、および往復ハガキにより調査を行った。

3. 結果

I. *retrospective study*: ハイリスク児1338例(出生の23.9%)中、転居先不明の228例(17%)を除いた1110名中598例(54.0%)が一次調査に回答した。SIDSの症例はなかったが、40例(6.7%)が急に顔色が不良になったり、呼吸が異常になって救急外来を受診したとの既往を認めた。一次調査に未回答であった512例中無作為に抽出した185例に同様の文面による二次調査および電話による三次調査を行い、133例(72%)より回答が得られたが、その内6例(4.5%)が同様な理由により救急外来を受診した既往を有していた。三次調査まで含めて回答が得られた731例(全出生の55%)中46例(6.3%)が abortive SIDS や SIDS を疑わせる既往を有していたが、その内訳は表3に示す如くであり、3名(0.4%)はその原因が不明であり abortive SIDS の範疇に入ると判断された。今回調査したハイリスク児群には SIDS の症例は認められなかったが、同期間に当院で出生した *low risk* 児中に2名(0.036%)の SIDS 症例が発生している。

表1 Retrospective & Prospective Study of SIDS (北里大学病院)

Retrospective Study			
Year	total livebirth	high-risk(%)	reply(%)
1978	1398	315 (23%)	102 (32%)
1979	1451	305 (21%)	125 (41%)
1980	1431	383 (27%)	174 (45%)
1981*	1435	335 (23%)	197 (59%)
(二次・三次調査			133)
	5610	1338 (24%)	731 (55%)

* Jan-Nov.

Prospective Study

1981, Dec-1982, Nov. : { 1518 : (total livebirth)
 { 1185(78%) : (followed)

表2 Retrospective Study of SIDS & Abortive SIDS
 in High-risk Neonate

A : Maternal Complications

previous fetal/neonatal loss	19
placenta previa	32
abruptioplacenta/fetal-distress	46
polyhydramnios	21
PROM/maternal fever	25
Rh incompatibility	65
severe toxemia/eclampsia	11
cardiac disease	38
thyroid disfunction-disorders	39
diabetes melitus	43
SLE/other collagen diseases	18
thrombocytopenia	7
renal diseases	35
asthma/other respiratory diseases	22
epilepsy	17
Others	122

B : Neonatal Complications

preterm/LBW-infant	521
hyperbilirubinemia(treated for 48hs or more)	61
birth asphyxia(treated)	92
sepsis/meningitis(include presuptivecases)	108
respiratory distress	35
cardiac diseases	11
neonatal seizure	15
multiple anomalies	33
Others	84

total 1338*

* Some cases had more than two complications.

II. prospective study: 昭和56年12月より57年11月までの12ヶ月間に北里大学病院で出生し生存して退院した1518例中、出生1年後まで外来または往復ハガキにより follow できたのは1185例(78.1%)であった。この調査期間中に SIDS の症例は認められなかったが、55例(4.6%)が急に顔色不良、又は呼吸困難等によって救急外来を受診している(表5)。その内の3名(0.25%)は、原因が明らかでなく診断名がつけられていなかったが、両親とのインタビューおよびその後の経過から、一時的な accidental な上気道の圧迫によるものであると判断された。3例ともにその後同様なエピソードはなく、1.5歳および2歳の時点で精神・身体発育ともに正常であった。

表3 Incidence of sudden onset of cyanosis, apnea and cardiorespiratory distress

Final diagnosis	Retrospective study (731)	Prospective study (1185)
febrile seizure	18	24
brochiolitis, croup & other respiratory diseases	13	14
gastroenterocolitis & dehydration	2	7
intersuception	2	0
colik	0	2
allergic reaction	0	2
chocking of milk	0	2
sepsis/meningitis	3	0
hypothermia	2	0
DOA*	3	0
apnic/cyanotic episodes by unknown etiology	3	3**
total	46(6.3%)	55(4.6%)

* DOA(death on arrival) : Down syndrome with CHD(2 cases)
cerebral palsy with pneumonia(1 case)

** : excluded from the Dx. of abortive SIDS because of benign
and single episode of cyanosis/apnea

4. 考案

今回のような調査方法においては、回答の得られた群と回答の得られなかった群は、homogeneousではなく、後者がよりSIDSのハイリスク群である可能性が高いことが考えられた。しかし、2次調査でも回答が得られず電話による3次調査によってようやく回答の得られた104例において、SIDSおよびabortive SIDSを疑わせる症例はなく、3例の熱性ケイレンと1例の下痢・脱水の計4例が救急外来を受診した既往があることを述べているのみであり、他のグループとのリスク度はほぼ同様であることが示された。1施設のみ

の症例において SIDS および abortive SIDS の頻度を云々する事は、その母集団の性格がはっきりしているとは言え、症例数があまりに少なすぎるどころから、より長期的な data の蓄積が必要と考えられた。

SIDS は1978年から82年の4年間にわたる retrospective および prospective study の期間中に出生した約7000の症例中2例(0.029%)に認められたが、いずれも low-risk 児であった。一方、abortive SIDS においては、prospective study において認められた3例は、いずれも一時的な上気道の圧迫および閉鎖によるものと考えられたところから、high risk 児を対象とした retrospective group に認められた3例のみが本症と判断された。3症例ともいずれも低出生体重児であり、かつ軽度ではあったが酸素投与を受けていた。retrospective study 群の低出生体重児数は313名であり、低出生体重児群からの abortive SIDS 発生頻度は0.96%と極めて高いものになった。

prospective study 中にみられた原因不明のチアノーゼ発作で救急外来を受診した3例は、いずれも正常成熟新生児であり、その原因としては accidental な upper airway obstruction が疑われており、これらの症例が、もしその発見が遅れた場合、SIDS に極めて類似した症例となることが考えられた。以上のことより abortive SIDS は低出生体重児や呼吸障害の既往のあった児により頻度が高く、SIDS は周産期の所謂ハイリスク因子を全く含まない児にも認められているところから、本症の予測、予防の困難さを物語っていた。

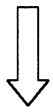
5. まとめ

北里大学病院において1978年から82年の5年間に出生した7128例を対象にハイリスク児1337例の retrospective study および12ヶ月間に出生した1518例の prospective study を行い、SIDS および abortive SIDS について周産期学的観点からその疫学的検討を試みた。発生症例数が少ないため、各周産期因子との相関を検討するにはいたらなかったが、abortive SIDS はハイリスク群より3例発症したのに対し、SIDS は low risk 群より2例発生しており、abortive SIDS は周産期ハイリスク因子、特に低出生体重児と呼吸障害の既往からその発生危険度がある程度推測される可能性を示した。一方、SIDS 症例は、low risk 群より発生しており、その発生危険因子と周産期因子の相関を得るためには、より長期的な、より大がかりな study の必要性が示された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに

SIDS および abortive SIDS の疫学的調査を周産(生)期の観点より行い、本症と種々の周産期因子との相関を検討し、その発生の予防および発生の予測を可能ならしめる危険因子(risk factor)を見つけ出す事を目的とした。本研究は、周産期班 4 施設の協同研究とは別に、北里大学 1 施設で出生した児の retrospective および prospective study より本邦における SIDS および abortive SIDS の発生頻度を周産期学的観点から検討を加えた。